

感覚をひらく——新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業
第2回フォーラム

伝える・感じる・考える——制作者と鑑賞者の対話

2017年12月16日(土) 13:00~17:00
京都国立近代美術館1階ロビー、講堂

【展示作品】

石原友明 《Untitled》

1993年、タイプCプリントに点字、アルミニウム、額縁 70.0×58.0×3.0cm

<点字の読み>

『かたち。いろ。うごき。おくゆき。ひかり。せかい。わたし。』

石原友明 《Untitled》

1993年、紙に鉛筆、点字、ガラス 42.4×34.4×15.0cm

<点字の読み>

『いちばんみにくいものがいちばんみたくらいのもの。』

石原友明 《Untitled》

1995年、真鍮に点字 37.0×30.0×16.0cm

<点字の読み>

わたしをみて! わたしをさわって!

鈴木康広 《空気の人》

2016年、長さ600×幅280×高さ約100cm

無視覚流鑑賞の極意六箇条

文責：広瀬浩二郎

無視覚流とは「思い遣^やり」である。

創る人（制作者）・操る人（学芸員）・奏でる人（来館者）の思いは、目に見えない。

さまざまな思いが交流・融合し、「思い遣り」が生まれる。

視覚は量なり、されど大量の情報には、かならず死角がある。

視覚はスピードなり、されど迅速な伝達は上滑りで、記憶に残らない。

無視覚流は「より少なく、よりゆっくり」を原則とし、

作品の背後に広がる「目に見えない世界」にアプローチする。

さあ、視覚の便利さ（束縛）から離れて、自然体で作品と対峙しよう。

みんなの「思い遣り」は、視覚優位・視覚偏重の美術鑑賞のあり方を改変し、新たな「動き」を巻き起こす。

1. 手を動かす＝まずは触角（センサー）を伸ばして感じてみる。
2. 体を動かす＝心身の緊張をほぐし、感性を解放する。
3. 頭を動かす＝触角がとらえた情報を組み合わせ、作品の全体像をイメージする。
4. 口を動かす＝作品の印象、感想を声に出し語り合う。
5. 心を動かす＝作品・他者との対話を介して、自己の内面と向き合う。
6. 人を動かす＝ミュージアムが発する能動・感動・連動の波が社会を変える。